

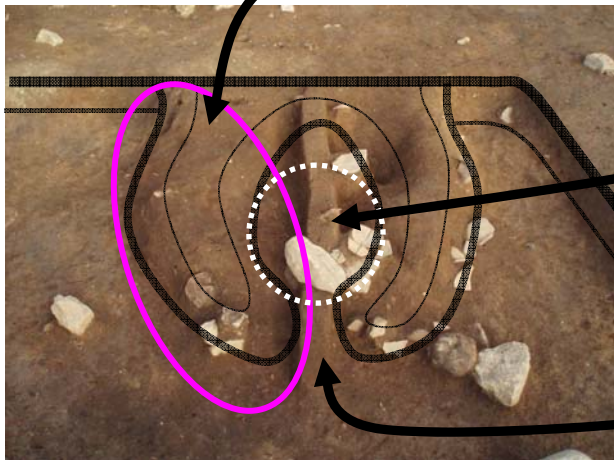
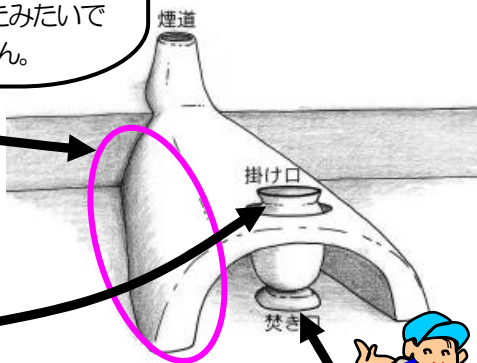
# 女夫石遺跡発掘調査速報

## No.22

今回は平安時代の竪穴住居にある「カマド」についてのお話です。カマドは炊事をする場所で、家族の生活の重要なものといえます。そこにはカマド神が住んでいて家を守っていると信じられていました。また、所帯数のことを竈数といったり、分家することを竈分けと呼んだりすることから、カマドがとても特別な存在であったことがわかります。そんなカマドを調査してみると、わざと壊されている場合があります。今回の調査でもありました。一体なぜ壊してしまったのでしょうか？

カマドの構造を簡単にと右のイラストのようになります。実際に発掘調査では、イラストのような状態で確認されることは少ないです。多くのものが、掛け口から煙道にかけての内側の空間が崩れてしまうことが多いです。

両脇は袖（そで）と呼んでいて、石が芯となって周りを粘土などで固めることが多かったみたいです。この竪穴住居のカマドには刀子（とうす）があったり、天井に使われていた石が抜かれているようなので、故意に壊したみたいです。カマドの神様に対する儀式だったのかもしれません。



ズリ：縄文時代と平安時代とでは竪穴住居の形だけじゃなくて他にも違うところがありそうだね！縄文時代には竪穴の真ん中くらいに炉（ろ）があったと思うけど、平安時代の竪穴には炉がないよね。家の中では火を使わなかったのかな～？

マキ：良く見ると、壁に張り付いて石が組まれているよ！焼けた土もあるみたいだよ。これがカマドっていうものなんだってさ！

ズリ：平安時代にもカマドがあるんだね。それにしても上手く石を組み合わせて作ってあるね。でも少し壊れているようにも見えるけど・・・。

マキ：カマドの役目が終わったときに、カマドを壊したりしたみたいだよ。

ズリ：何でだろうね？

マキ：カマドにいる神様を次のカマドに連れて行くためとか言われているみたいだよ。女夫石平安時代人にとって食べ物をつくる火やカマドには神様がいて感じていたんだらうね。(つづく)



これは縄文時代の炉です。石を使うのは一緒だけど、竪穴住居の中での位置や構造などは全く違います。でもちょっと気づいて欲しいことがあります。炉の角に細長い石（石柱・せきちゅう）があります。石柱は石棒との類似が指摘されています。ということは、女夫石縄文人にとっても火を起こす場所は神聖な場所だったのではないのでしょうか？カマドに神様がいて考えられているように・・・。証明することは困難だけど、何だかそんなことを思ってしまうようになります。皆さんはどのように思いますか？「担当者の勝手な思い込みだよ！」という声が聞こえてきそうですが・・・。